

氏名	かど 門	あ 垂	き 樹	こ 子
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)			
学位記番号	経 博 第 298 号			
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日			
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当			
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻			
学位論文題目	ジ ョ ン ・ ロ ッ ク の 経 済 認 識 —— 統 治 と 啓 蒙 ——			
論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 秀 夫	教 授 根 井 雅 弘	助 教 授 竹 澤 祐 丈	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「ジョン・ロックの経済認識—統治と啓蒙」は、イングランド名誉革命期の最大の思想家であったロックの経済思想の特質を解明するもので、アプローチの仕方はQ・スキナーが提起したコンテキスト主義による。すなわち、16, 17世紀の著作、パンフレットに見られる社会・経済思想とロックのテキストとの比較・検討を行なうことによって、ロックの意図と実現されたテキストの意義を明確にすることである。ロックの意図を解明するためには関連する諸文献の精査、すなわちテキストとコンテキストの比較を十分に積み重ねることが不可欠である。

ロックは政治、哲学、宗教、教育を範囲として持つ「知」の枠組との関連で経済思想も展開したから、その知的枠組を視野に置くことも必要である。本論文は特にロックの経済思想と主著『統治二論』との関連を重視しつつ、プロパティ（所有権）、トレードと公共善、救貧という三つの主題を扱い、ロックの統治論と経済論が、トレードの繁栄を通じて公共善を実現することを目的として展開されたものであることを論証している。

第1章「ロックのプロパティ論形成におけるフィルマー論争の意義」は、初期著作『為政者論』や『自然法論』においてプロパティは神あるいは自然法と関連付けて論じられていたこと、為政者による侵害の危険性の認識はなく、したがって被治者のプロパティの保全を統治の目的とする議論がなかったことを確認した上で、『統治二論』のコンテキストとして最も重要な家父長制論者フィルマーの主張をめぐる論争との関連で、ロックのプロパティ論の意図と意義を解明している。すなわち、フィルマー論争を回顧、整理したうえで、ロックの独占的領有批判を論じ、その文脈を明確化し、ロックにおいては生命・自由・プロパティは一体であり、その保全が統治の目的とされたことを説いている。

第2章「トレードによる公共善の追求」においては、ロックの経済論文は同時代の経済パンフレットと違って、時局的なパンフレットではないという認定から出発し、トレードの概念を様々なテキストを通じて詳細に検討するとともに、ロックの経済思想を正面に据えて分析を行なっている。著者は、地主的利害と商業的利害という二項対立との関連を問う（階級還元論）という従来の研究の妥当性を退け、経済循環の視点から土地と商業をともに包括するものとしてのトレードを総体的に見るのがロックの視点であることを主張する。その結果浮かび上がってくるのが公共善の追求という理念である。

第3章「隣人愛と統治」はロックの救貧思想を扱う。ロックはファーミンなどの同時代の救貧思想の影響を受けつつ、貧民をトレードに有用な労働者に育成することを目的とする救貧法案を提出した（物乞いの禁止やワークハウス等）が、それは決して重商主義的といった概念で説明すべきものではなく、公共善の思想として解釈すべきである。そこではキリスト教の隣人愛の思想が重要な役割を果たした。『統治二論』の公共善の対象には貧民も含まれていると考えるべきである。ロックは貧民も理性的被造物として考えたのである。

以上のような要旨の考察の後に、最終章として、論文全体を概観して、論文自体の不十分な点と今後の課題について展望を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ロック経済思想の特質に、いくばくか新たな光を投じた研究である。ロックのような思想家の場合、新しい研究を生み出すことは至難の業である。しかし、本論文はいくつかの点で重要な貢献をしており、価値のある成果と見なすことができる。

第一に、ロックのプロパティ概念の形成過程について詳細な検討を行なった。すなわち、排斥法危機下のフィルマーの家父長制論に基づく絶対君主の独占的領有権を論駁する必要から労働所有権論としてのプロパティ論を構築したという通説を踏襲するものの、従来の研究以上に詳しくロックの著作を精査して、ロック自身におけるプロパティ概念の歴史を明らかにした。さらにフィルマー論争の文脈を丁寧に辿って、ロックまでの様々な思想家の所有権に関する文献と所論を跡付け、またフィルマーの議論についても内在的に検討を加えた上で、ロックにおいてレヴェラーズにさえ近い所有権概念が成立したプロセスを明確化した。

第二に、ロックの経済思想を階級的基礎に還元するのではなく、諸階級が理性的被造物としてトレードに関与することによって公共善に貢献することを展望する経済循環論として解釈したことも重要な点である。もちろん、これは非歴史的解釈ではない。それどころか、トレードの概念に注目して、ロックが参照した文献とロックのテキストを丁寧に精査するとともに、ロックが当時のイングランドの実情を踏まえて、オランダとの差異を考慮しつつ、地主、商人、労働者という3階級が為政者の指導によって、トレードを盛んにすることによって公共善に寄与するべきことを主張していたということを論証している。

第三に、ロックの救貧思想を、理性的被造物としてのキリスト教的人間観とそれによる隣人愛の思想と結びつけたものであるという理解を通して、ロックの公共善の思想に関連づけて位置づけた。その際、トマス・ファーマンははじめとして、ヘイル、ベラーズ、チャイルドの所論を分析し、ロックの説との異同を明確にしている点も重要である。

こうした成果が、ロックと同時代人の手になる相当多くの原資料の精読と比較研究を通じてもたらされたことも、強調しておきたい。本論の展開に十分に生かしきれていないくらいがあるものの、タワースンははじめとして、本論文によってわが国に紹介されたパンフレット作者もあり、著者がわが国ではじめて調査した一次文献はいくつもある。重要な二次文献も広く渉猟している労作である。

このようにメリットのある論文であるが、残された課題もある。第一に、著者自身が述べているように、ロックの植民地論、奴隷制論の分析がまだ行なわれていない。それを行なうためにはロックも参加した名誉革命体制の国際関係、帝国形成というコンテクストを踏まえた分析が必要になるだろうし、それは課題として残されている。またより広い時間軸に即してロックを位置づけることも、著者が述べているように、これからの課題である。そして「公共善」の概念の歴史的分析も欲しい。というのは古来、多くの思想家が「公共善」を語ってきたし、その内容は必ずしも自明ではないからである。ロックは個人主義者とされている。個人主義者にとって「公共善」とは何であり、いかにして実現しうるのかについては、多様な議論がありうるであろう。そして啓蒙思想家ロックに迫るためには、宗教論、教育論、そして『人間知性論』についても、より本格的な研究をしなければならないであろう。本論文は、簡潔である一方、説明が必ずしも十分でないために、全体の議論の構造が十分には明確になっていない面がある。全体の構造をより詳細かつ包括的に説明する叙述がほしかった。

こうした課題が残っていると看做しても、本論文は優れた考察を展開しており、博士（経済学）論文として価値ある業績であると認める。

なお、平成19年2月20日、論文内容とそれに関連した試問を行なった結果、合格と認めた。